

# 意外と知らない？戦前期の静岡茶の歴史

粟倉大輔（静岡県立大学グローバル地域センター）

静岡県といえば、言わずと知れたお茶の一大生産地です。そこで生産される静岡茶の歴史、特に戦前期のことについては、牧之原の茶園開拓や、清水港からの輸出などのことが、よく知られているかと思いますが、しかしながら、戦前期の静岡茶の歴史を紐解いていくと、まだまだ知られていないことや、意外な事実などが浮かび上がってきます。ここでは、そのあたりのところをみていきましょう。

## アメリカ代理公使が静岡にやって来た！！

1872年、明治になってからまだ5年という明治時代の幕開けからまだそれほど時間が経っていないこの時期に、日本におけるアメリカの外交官たちのトップともいえる**駐日アメリカ代理公使を務めていたチャールズ・シェパード（Charles Shepard）**が静岡にやって来たのです。

1872年4月26日（明治5年3月19日）にシェパードと外務大輔（現在の外務次官）である寺島宗則との会談のなかで、シェパードは**茶産地である駿河＝静岡に行きたい旨**を寺島に伝えています。それから数日後の**72年5月9日（5年4月3日）に横浜を出帆し、翌日には清水に上陸**しています。その後、**足久保**に向かった模様で、そこで茶の生産状況などを視察したようです。そして、4日後の5月13日（4月7日）に静岡を出立し、帰っていきました。

静岡での滞在期間はそれほど長くはありませんでしたが、このことについてシェパードが本国の国務省に送った報告書が残っています。その冒頭には、次のような文言が書かれています。

‘ the results of a tour made during the past month for the purpose of observing the growth, culture, and preparation of tea in Japan. **The portion of country visited (Suruga) is one of the largest tea growing districts in the Empire.** ’

すなわち、今回の報告書が、目的である日本の茶の栽培や製造といった生産面についての視察結果をまとめたものであることがわかります。同時にここでは、**訪問先の駿河＝静岡が、日本で最も茶生産が盛んな地域のひとつであることが指摘されています**。この時期から、アメリカ側にも静岡での茶生産の状況が伝えられていたのです。

## 清水港からの静岡茶の輸出と外国商人

しかしながら、上記のシェパードのような外交官よりも、日本で活動する外国商人（外商）の方が、より輸出品としての静岡茶に注目していたといえるでしょう。実際に、輸出された日本茶を取り扱っていたのは、日本人の商人だけではありませんでした。外国の貿易商人たちも**再製工場の経営など日本茶輸出のために横浜や神戸で活動しています**。**1899年に清水港が開港**し、清水港が外国と貿易できる港湾になってから、彼ら外商が次第に静岡に集まってきました。**外商たちは、静岡でも再製や輸出を行っていますが、彼らの輸出茶の取り扱いの規模は日本人商人を上回るほどでした**。戦前期の静岡茶の輸出は、外商たちによって担われていたといっても過言ではないのです。

清水港からの茶輸出と外商

単位：トン、%

年次	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1931	1932	1933	1934
ヘリヤ	1,983	1,957	1,997	2,013	1,831	1,825	1,720	1,737	1,682	1,217	1,499	1,531	1,573
ホイットニー	2,616	2,286	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
アーウィン	1,928	1,793	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
アーウィン・ホイットニー	—	—	2,910	3,220	3,268	3,402	3,579	3,685	3,756	3,827	4,121	4,799	4,566
シーグフリード・シュミット	1,281	1,289	1,467	1,590	1,665	1,620	1,641	1,405	1,497	1,384	1,671	1,831	1,288
メーシー	1,012	710	681	1,120	269	—	—	—	—	—	—	—	—
ブランデン・ステイン	—	28	594	412	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ゴットリーブ	527	470	406	457	484	443	—	—	—	—	—	—	—
ビー・エー商会	—	—	134	311	388	457	748	632	544	666	909	1,149	642
エム・ジェー・ビー	—	—	—	404	390	339	371	412	337	304	298	308	—
ブル	158	194	170	225	81	—	—	—	—	—	—	—	—
アングロ・アメリカン	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	614
外商取扱量総計(A)	9,507	8,732	8,362	9,351	8,391	8,141	8,029	7,834	7,891	7,430	8,503	9,609	9,138
富士製茶	921	1,276	1,277	1,305	977	1,218	1,705	1,724	1,570	1,468	1,387	1,049	175
静岡貿易	6	8	13	13	10	9	7	11	4	7	7	13	6
三井物産会社	—	—	—	—	—	—	359	242	269	333	284	494	391
日本茶直輸出組合	—	—	—	—	—	—	—	—	140	1,080	990	857	609
岩井商店	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	923	909
三菱商事	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	334	630
総輸出量(B)	10,863	10,399	9,787	10,819	9,569	9,485	10,476	10,071	10,149	10,639	11,577	13,363	12,015
外商割合(A/B×100)	87.5	84.0	85.4	86.4	87.7	85.8	76.6	77.8	77.7	69.9	73.5	71.9	76.1

出所) 静岡県茶業組合連合会議所編『静岡県茶業史(続編)』静岡県茶業組合連合会議所、1937年、269～275ページより作成。  
注) 1ポンド=0.453キログラムで換算。

- ・左の表を見ると、**外商の取り扱い総数が全体のほとんどを占めていたこと**がはっきりします。
- ・また、日本人の業者では**原崎源作の富士製茶**の取扱量が断トツですが、同じような規模を取り扱う外商が複数いたこともわかります。
- ・そのなかの**アーウィン・ホイットニー社**について詳しくは、ポスター展示「英国系茶貿易会社グループの近代東アジアにおける動向の解明に向けて」をご覧ください。